

「東日本・家族応援プロジェクト in 宮古 2021」を開催しました！

人間科学研究科教授 村本邦子

11月5日（金）から7日（日）、宮古にて最終回となるプロジェクトを開催しました。国士郎家族漫画展は、10月25日（月）から11月14日（日）、イーストピアみやこ市民交流センターで開催して頂きました。

11月5日、夜の打ち合わせ場所に集合だったので、それまでの時間、院生たちは各々、フィールドワークを行い、私自身は、二年目に大船渡のプログラムで大変お世話になった方を訪ねてきました。十年経ったのに、以前より若々しくお元気そうで、とても嬉しい再会でした。あの時の子どもたちも大きくなって、それぞれ自分の道を歩んでいるそうです。大船渡はその後、何度も訪れてきましたので、私の中ではアップデートされてきましたが、あらためて初めて降り立った時の様子を思い出し、現在の風景に重ね合わせていました。十年ひと昔と言いますが、あれから長い年月が経ったのだとしみじみ思いました。宮古へ向かう三陸道も完成し、すっかり便利になっていましたが、美しい三陸海岸沿いのくねくね道を恋しくも思います。

6日は朝いちばんに魚菜市場に足を運んでみました。リニューアルされてスペースがとても小さくなっており、ここで漫画展をやっていた時の賑わいを懐かしく思い出しました。プログラムとしては、お昼を挟んで漫画トークと交流会を開催しました。いつもお世話くださっている社会福祉法人若竹会さんは、高齢者や障がい者たちと関わるお仕事であることから、コロナ禍でのイベント開催はまだ難しく、プログラムは、今回もリモート開催となりました。いつも賑やかに笑顔で参加して下さってきた参加者のみなさんとお会いすることが叶わずプロジェクト終了となることは、とても残念なことでしたが、リモートでの漫画展や交流会でも暖かいつながりを感じることができました。

終了後、イーストピアみやこの漫画展を見に行き、センター所長の中嶋良彦さん、施設運営事務員の山口正伸さんにご挨拶をしました。今年はワクチン接種などの関係で、スペースが限られたなか、工夫して素敵な展示空間を作ってくださいました。アンケートやノートにはさまざまな声が寄せられ、プロジェクト終了後も漫画展が続いていくといいがと思います。

それから三陸鉄道に乗って、新しくできた「しんたろう駅」に向井いました。毎年お世話になり、現在は田老総合事務所の所長となっておられる齋藤清志さんをお訪ねしたのですが、駅まで出迎えて、たくさんのお話をしてくださいました。そこで田沢さつき（2021）『田老の街で生き抜いて～二度の津波を乗り越えたおサヨさんの物語』（宮古民友社）を頂いたもので、さっそく読みましたが、ふたつの津波に戦争、大火など次々と襲う災禍を生き延びた女傑おサヨさんの物語で、明るく逞しく生きる女性の生き方としても、また宮古の歴史や文化を知るうえでも学ぶことが多いものでした。民話のように語り継ぎたい物語だと思いました。他のメンバーたちにも読んでもらうつもりです。

7日は朝8時20分集合で、田老の学ぶ防災へ向かいました。毎年お世話になっているガイドの佐々木純子さんと一年ぶりの再会を喜び合いました。防潮堤はさらに拡大され、水門は塗り固められて閉ざされていました。いつものように田老観光ホテルで津波の映像を見た後、新しい居住地となっている高台を見せて頂きました。災害公営住宅の家賃がどんどん上がっていき、最初1万円だったものが、今では6万円に上がり、支払いができず出ていく人もいて、空室があり、一般募集もしているとのことでした。この後、運転手さんとお話をすると、実は、運転手さんは5年前の台風で岩泉の家を流されたという方でした。震災後は防潮堤や復興道路工事にも関わっており、現在は宮古に住んでおられるそうです。言葉を失いました。

それから、道の駅で、齋藤さんお勧めの「畠山一伸さんの林檎」を買い、田老のシンボルである三王岩を見てから、遠野へと向かいました。道の駅「風の丘」で簡単な昼食を買いましたが、ずいぶん大きくきれいにリニューアルされており、地元の人で賑わっていました。それから、遠野博物館の前川さおりさんを訪ねました。2011年度のプロジェクトでお世話になった学芸員さんです。前川さんも以前より生き生きと楽しそうでした。やはり、震災当時は大変だったと思います。前川さんの案内で博物館を見学しお話を聞いた後、最後は例年通り、大平悦子さんの藁ぶき屋根の古民家で民話を聞かせて頂きました。パチパチ燃える囲炉裏を囲み、手作りの暖かい「ひつつみ」や漬物を頂きながら、民話を聞かせてもらうという最高に贅沢な時間でした。

コロナ禍で現地に行けるか案じていましたが、プロジェクトをやってきた遠野、大船渡、宮古に足を運び、これまでお世話になってきた皆さんとお会いすることができ、最終回として本当に良かったと思います。今、十年の変化を思い出しながら、出会いを重ね紡いできた岩手のみなさまとの関係をありがたく、大切な宝のように感じています。プロジェクトとしては終了しますが、これからも関係は続いていくことでしょう。お世話になったみなさまに心から感謝いたします。



2021 宮古プロジェクト最終年

団士郎

関西からの道のりは本当に遠い。午前中に自宅を出発して、到着は夕方になった。恒例だが一年空いた宮古市内「よし寿司」で今回のメンバーが集合。これが最終回かと思うと、コロナだけではなくいろいろあった10年余を、よくやってこられたものだと思う。

翌土曜の午前中は定番の漫画トーク。宮古市の福祉関係職場はまだ、コロナに対して厳しい規制を敷いている。その結果、私は現地に入っているが「漫画トーク」はzoomになる。

ホテルの部屋からzoomで「木陰の物語の物語」を発信。同じホテル内の各部屋のプロジェクト参加者と、zoom参加のあちこちの人を繋いで1時間半の話。参加院生の感想、意見を翌日のフィールドワークへのマイクロバス車中で聞く。

開催中のマンガ展は場所が二階に移動して、コンパクトな展示ゾーンを形成していた。駅からホールへの動線上に位置し、他のイベント参加者やたまたま遭遇して見て貰えた方も多かったようだ。今後のマンガ展開催について確定はまだないが、マンガ展単独ならば、会場の年間行事の中に組み込んで、一定の役目を継続的に果たすことは可能だろうと思う。

二日目の午後ひとつめのプログラム後と、三日目の午前中は、田老地区で過ごす。10年経った現在としてみえる風景に過去を重ねても、それほど明瞭な昔の姿を思い起こせるわけではない訪問者に届くことは限られている。それでも、すっかり海の見えなくなった新しい堤防に囲まれた田老が、過去のように「堤防万歳！」などと言っているのはいいことはわかる。

100年単位の体験の継承は、未来に向けてどれくらい力を持ち続けられるのだろう。石碑を見ながら過去にも、そう思った人は居たし、だからここに書き記したのだと思った。



11月5日から7日までのフィールドワークとして岩手県宮古市に伺った。1日目は宮古市内のお寿司屋さんで夕食を頂いた。2日目はオンラインで国士郎先生の漫画トークと10年間東日本家族応援プロジェクトに携わってくださった方を囲んで宮古の震災の10年とこれまでの活動を振り返る交流会をオンラインで行い、その後、三陸鉄道で田老に行き田老総合事務所所長・齋藤清志さんのお話と質問をさせていただいた。3日目は田老での学ぶ防災・遠野市博物館・遠野物語を聴かせていただいた。

初めてのプロジェクト参加を通しての感想は「とても楽しく有意義な時間を過ごすことができた」である。フィールドワークの前に事前課題として宮古市について調べた。しかし、実際に「現地に行くこと」でしか得られないことを非常に強く感じた。それは実際に「見て・聴いて・触れて・体験する」ことだと思う。特に印象に残ったこととして『防潮堤』がある。それに主軸を置いて述べていきたい。理由として事前課題で浮上した「防潮堤」とフィールドワークとしての活動として同じ『防潮堤』の2つの違いが明確で、だからこそ学びが大きかったと感じたからだ。

フィールドワークを通して津波の到達の高さや津波遺構たろう観光ホテルでの映像を視聴する中で、津波の恐ろしさを感じた。しかし、実際にフィールドワークでお話をした方達に共通するものは、津波という危険と隣り合わせでもその土地を選んで住まわれている方達だった。宮古市を離れた方達を否定するのではなく、人それぞれであることを前提に「私はここにいる」という方達が多かったことが印象的だった。田老を例としてあげると、「津波の田老」と表されるように過去から津波と隣り合わせであったことをフィールドワークで改めて感じた。2日目の齋藤さんと3日目の学ぶ防災でのガイド佐々木さんのお話しなどから「防潮堤はあくまでも時間稼ぎのもの」と話された。防潮堤がもたらす心理的な安心感や防潮堤が建設されたことによる弊害を経験したからこそ、この言葉が語られたのではないかと感じる。また、『防潮堤』に依存しないように彼ら自身の戒めとして話されているようにも感じ取れた。事前課題では過去の取り組みから受け継がれたものと防災教育としてのハードな取り組みが対立しているように感じていた。具体的には、[津波でんこと防潮堤]である。実際に現地に行き学ぶ中で、これは[政府と地方自治体]や[集団の意識と個人の意識]という対立構造を意味しているのではないかと思った。この対立構造は[多数派と少数派]で表すこともできるのではないかと思う。私たち自身も震災の経験という文脈に立った時、被災していないことから「多数派」に属する。だからこそ、少数派に属する被災された方達の経験を学びに行く姿勢が重要だと感じた。また、宮古市へ行った3日間、快晴で海がとてもきれいだった。しかし、海沿いに異常な雰囲気を出す防潮堤が[海と陸]を断絶するかのよう存在していた。宮古では水産業が盛んであること、1日目のお寿司屋さんの海鮮(特に秋刀魚)や2日目のお魚がとてもおいしかったことから、昔から海と共に生活し

てきたことがうかがえた。宮古市の方達は海がもたらす自然災害の怖さと、豊かさをもたらしてくれる資源の源である 2 つの側面を理解していると思う。だからこそ、ハードな防災として国や地方自治体に取り組む『防潮堤』に過信せず、1 人 1 人の行動が生死を左右する重要なことだと考えているのだと思う。1 人 1 人と話させていただく中で、形は違えど彼ら自身の過去を振り返り、反省し今までの蓄積をさらにより良くしようとする宮古市民としての誇りを感じられた。

臨床を学ぶ私にできることは何かという疑問を抱いた。それは「学ぶ姿勢」だと思う。専門家として現地に赴くのではなく、体験を聴かせていただくという姿勢が村本先生のプロジェクトの重要なキーワードである『証人』と繋がる点だと感じた。外部から被災された方達の中に入ることで、その経験を共有することが私たちだけでなく、被災された方達の相互の影響に繋がることだと思った。これまでの授業で専門家の姿勢として現地に赴くことの危険性を学んできた。これが学ぶ防災での「ガイドさんの伝えたいこと 3 つ目」の「エキスパートエラー」に通じるのではないかと思う。体験していないことを学術的/理論的基盤から、指導や評価として行う専門家の弱さを感じた。私自身が大学院生として学問を学ぶ立場であることでより一層この点に気を付けていきたいと感じた。そして、第三者だからできることも同時に感じた。体験していないからこそ第三者同士で共有し合える部分があると同時に発信することに意義があると感じた。

最後に 3 点述べたいと思う。それぞれは、①現地の方達と交流することの意味②これから先、東日本大震災とどのように向き合うべきか③フィールドワークでの反省と課題点だ。
①現地の方達と交流することの意味

フィールドワークを通して宮古の方達とお話をした。彼らが辛い経験をされたにも関わらず、とても笑顔で生き生きと過去の出来事を話されていた。この不思議な印象から第三者が現地に伺うことの意味を考察してみた。前もっての断りとして、自分の今回の活動を大げさかつ肯定的に述べさせていただく点だ。「語り合う」こと、「話すこと」が辛い体験をされた方達の心の整理に繋がることが臨床心理学の分野でも明らかになっている。この点から私たちが東日本大震災の経験や学びをしに様々な方達と交流したことに意味があったのではないかと思う。つまり、現地の方達の過去の経験の話す機会を与えられたのではないかと振り返る。また、この心理学的観点に焦点を当てると宮古にいらっしゃる方達が少しでも「10 年間どのような思いで過ごしてきたか、自分は頑張ってきたんだ」と振り返られるような機会を提供することができたのではないかと思いたい。以上のことより、この活動に関わる方達全てが東日本家族応援プロジェクトの「装置」として相互に影響を及ぼしていたのではないかと感じた。

②これから先、東日本大震災とどのように向き合うべきか

東日本家族応援プロジェクトの 11 年間のうちの最終年度の学生の 1 人の「証人」として宮古へ参加した。フィールドワークを通して自分が感じたこと、学んだことを少しでも周囲の人に伝えることが私のできることなのではないかと思う。また、被災された方達の経験を

安直かつ平易な言葉で表現することに抵抗感を感じた。私ができることは彼らの経験や苦しみを少しでも理解しようと学ぶ姿勢とそれを私の周囲の人へ共有することが現在の自分のできることではないかと思った。

③フィールドワークでの反省と課題点

臨床の観点から震災体験などの非常に大きな心理的負荷のかかる経験をされた方達には、話し終えた後に身体的/心理的症状が出ると言われている。今回その点の配慮がなされていなかったと反省している。ある宮古の方は「宮古の人は、みんな素直で良い人達ばっかだ～」と話されていた。この3日間のフィールドワークでお話をさせていただいた全ての方達が非常に暖かく私たちに様々な体験をお話していただいた。だからこそ、出会った方達の「語り」の後のフォローをする必要性を感じた。私はまだ心理職の卵であるため、立派なケアはできないがせめて別れ際に「今日はいつもよりゆっくり休まれてください」などの言葉掛けはできたのではないかと反省している。



東日本・家族応援プロジェクト in 宮古 ～三陸海岸で生きるということ～

対人援助学領域 M1 倉崎彩乃

東日本大震災が起きた時は高校生で部活動に励んでいた。外で活動をしていたため揺れには気づかなかった。部活が中断され、東北に家族や親戚がいる人はすぐに連絡を取りなさいという先生の言葉にもピンとこなかった。帰りの電車を待つ間、駅で友人と携帯電話で大震災の様子が映し出されたニュースをみた。大きな地震が起きたみたいだ。“大津波”という大きな字幕に衝撃を受けたことを鮮明に記憶する。私は阪神淡路大震災の年に生まれたため、年を重ねるごとに震災からそれだけの年月が経過したと毎年思ってきた。しかし東日本大震災は遠い土地で起きた出来事。報道番組で特集されるも目に止めることは少なかった。お恥ずかしい話、東日本大震災に無知だった。阪神淡路大震災の年に生まれた縁から東日本大震災でなにが起きたのか知るところから始めたいと思い今回プロジェクトの参加を決めた。

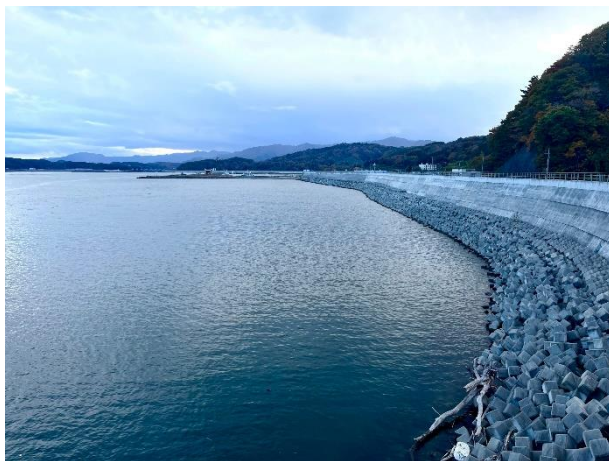
花巻空港到着後、高速に乗り約 1 時半ほどかけ三陸海岸を目指した。天候にも恵まれ見渡す限り美しい紅葉が広がりドライブ日和となった。国道 45 号線を北上し宮古市内へと向かう道中、幾度と太平洋の絶景を眺める。しかし海と陸の間には巨大な防潮堤が聳え立ち陸続きの海を眺めることは出来ない。防潮堤を下から見上げるとかなりの高さがあり、一面巨大な壁が広がるため圧迫感を感じる。そして大きな塀の中に囚われている感覚となった。外から来た人間の印象としては、防潮堤がなければ目の前は綺麗な海が広がりとても美しい景色だったのになってしまう。

三陸海岸に面する地元でも有名なカフェを訪れた。カフェの周りは巨大防潮堤に囲まれている。防潮堤建設以前は、店内から海を眺めることができたが現在は、塀の中のお城という印象をもつ。防潮堤へ上り実際に歩いてみた。国道 45 号線と海岸に沿い続く防潮堤は大きく重量感を強く感じる。地図で位置関係を確認するとせまい湾が入り組む地形となり、震災当時この狭い湾岸に津波が入り込んだことで勢いを増し、甚大な被害に至ったと地形から推測できる。海を挟み反対岸には町らしきような場所が見えるが、町の前にも防潮堤が聳え立ち町の姿を確認することはできなかった。カフェのマスターは院生に対し「(防潮堤を)上ってきたの？君たちはどこからきた？もうすぐ閉まるけどいいか」と声をかけて下さった。経緯を説明すると、テレビモニターを付け、震災前の様子から震災後の様子、マスター自身の被災体験を時間の許す限り話して下さった。防潮堤が建設される前、店の前には海が広がりとても美しかった。震災では 1 階はすべて流され、骨組みだけが残ったと 1 枚の写真を見せてもらう。椅子も瓦礫もなにもなく骨組みだけになっていた。マスターは「綺麗でしょ。誰かが片付けたんじゃなくて全部津波にもってかれた」。現在の店内では想像ができない姿が写っていた。マスターは「三陸海岸で生活すると人生で 3 回は津波がくる。昭和と十勝、そして東日本。津波はくる。だから逃げなきゃなんばい。この防潮堤だって想定されてる津波の高さは越えてくるんだ。だからこんなの作っても意味ない」と語った。

現地に赴くまで東日本大震災は突然起こり、東北に生きる人々に多大な被害をもたらした未曾有の災害だと認識していた。しかし、三陸に生きる人々にとって津波は一生向き合うべき課題であり、津波が来たことは特別なことではなかった。震度 5 強の揺れが起き地震の被害ではなく、想定をはるかに超える津波が襲った。津波が起こることを覚悟した上で三陸海岸に住んでいる。復興とはなにかを考えたときに、見えたものは津波とどう共存するかの町の姿だった。誰一人東日本大震災なんて起きなきゃよかった、津波なんてこなければという意見は一切なかった。出会った全ての方が、当時の被災状況、津波の高さを丁寧に語って下さった。至るところで「伝承」という言葉を目にした。経験を語り伝えることで復興になる。院生が事実を知り、語りを聞くことが三陸に生きる人々の証人となるのだと考えた。

宮古でのフィールドワークで出会った担当者さん・お店の方、タクシーの運転者さん皆さんとても丁寧に震災当時のことを話してくださいました。お心遣いに心が温まるばかりでした。

貴重な学びの機会を有難うございました。



【1日目】

伊丹空港→いわて花巻空港→鶴住居（釜石）→風の電話→喫茶「異人館」（宮古）
→スナック「サチコ」

○鶴住居（釜石市）

うのすまい・トモスは「東日本大震災の記憶や教訓を将来に伝えとともに、生きることの大切さや素晴らしさを感じられ、憩い親しめる場」として、いのちをつなぐ未来館（震災伝承と防災学習のための施設）・釜石祈りのパーク（東日本大震災犠牲者慰霊追悼施設）・鶴の郷交流館（観光交流拠点施設）からなっている。鶴住居は釜石市の中で震災の津波による犠牲者が一番多いところで、死亡者 305 名、行方不明者 49 名（釜石市／死亡者・行方不明者 927 名）であった。津波の高さは 32.87m と記録されている。津波で亡くなった人の多くが、「鶴住居地区防災センター」で、避難者 196 名中、162 名の方が亡くなられた。防災センターは津波の緊急避難所には指定されていないが、多くの住民が避難してきた。建物は 2 階建てであったが、津波は 2 階の天井より人の顔一つ分程度低い所まで達したため、避難者のほとんどが溺死し、津波が引いた後は建物内に多くの遺体が折り重なっていた。いのちをつなぐ未来館では、今回の津波による想定外の浸水範囲に「ハザードマップは安心マップではない」と指摘していた。



○喫茶「異人館」

マスターは地域の消防団員で震災時、水門を閉めるために防潮堤（7m ほど）に上っていたところを津波にのまれて流された。「もうだめだと思った。」黒い波に流されたがれきと一緒に防潮堤の吹き溜まりに押し流されたが、瓦礫は残るが海の水が引く際に、浮いている人は水に引き込まれていく。黒い水を何度も飲んだが、自分はどうにか助けられた。

喫茶店「異人館」の建物の 1 階は家具等も含めて全部流されてしまい、建物のフレームだ

けが残った。中を改装して再開している。室内の壁には津波が上がってきたところに変色していたのが、静かに津波の恐ろしさを物語っていた。



○スナック「サチコ」のママとの出会い

ママの店も津波で流され、今は移転して営業している。近隣の店舗について、コロナの影響もあり、閉店した店も多い。コロナの時期は営業しなければ経済的な支援が受けることができた。震災後の台風の時にも店の半分ぐらいまで水が来たが、補助金が出て修理ができた。

防潮堤について聞くと、住民は防潮堤の建設は希望していない。国または県が作っている。防潮堤は順番に作っていて、宮古は震災4、5年後にできた。現在はまだ工事が続いている。水門は津波が来たら、水門を閉めて津波が町に入らないようにするそうだ。

宮古に大きな防潮堤があったことで、過信して逃げなかった人もいたと思うとのことであつた。

震災前は「異人館」の手前までは防潮堤があつたが、震災後はマスターが防潮堤の建設に最後まで反対していたが、結局、囲われるように防潮堤ができることになった。

津波の遺構である「たろう観光ホテル」は今の市長が田老出身であつたので、市長として震災を語り継ぐ施設として残すのはその意向が強い。地元の住民には賛否両論がある。残したいと思っている人ばかりではない。年間、莫大な維持費がかかるのは、全て住民の税金である。



【2日目】

○浄土ヶ浜

浄土ヶ浜に行く道中、利用したタクシーでは、運転手さんに私達が宮古に来た主旨を伝え、とても自然な流れで国道から少し外れた高い防潮堤に囲まれた宮古の漁港により、震災後の町の様子について話してくれた。大震災を経験した宮古に住んでいる人の思いに触れたような気がした。

浄土ヶ浜は津波がきてもその自然は破壊されなかったが、周辺にあるマリンハウスなどは2階まで津波がきて、船がマリンハウスの上に乗っていたとのこと。青の洞窟を見るために乗った「さっぱ船」の船頭さんが話してくれた。ここでも自然の力強さと人工物のはかなさを感じた。また震災当時のことについて尋ねると、どの人も表情が少し引き締まって、真摯に応じてくれるのが印象的であった。

観光地であるにも関わらず、今までの津波の経験から得たことが刻まれた「津波記念碑」があり、宮古では津波が東日本大震災のことだけでなく、以前から津波とともに生きる土地の歴史なんだとあらゆるところで感じた。



○漫画トーク

団先生の漫画を見て、先生のお話を中心に、参加者で感想や考えを共有した。私の同じグループの方は、過去に団先生のワークショップに参加した経験がある支援職の方であった。団先生の漫画、お話を聞いて、支援方法について「問題解決をしようとしてしまうが、何かちょっとした変化を後押しするようなことが大切である」や、「当事者の視野を広げる支援、小さなことでもよいので本人が動くことによって解決が見える」などの意見が出た。

人も物事も必ず変化する（起きてほしい変化が起こらないこともあるが）ためには、自分を変えようとするか、他人を変えようとするか、状況を変えようとするかのどれから影響をうけるため、起こしやすい変化から手をつけることがよいと学んだ。

○交流会

参加者は若竹会の鷺田さんと院生、先生方であった。個人的に聞きたかった震災当時の自閉症などの障害のある人のこと、震災後事前に準備しておくことなどについて尋ねた。金曜日は重度の ASD の利用者の多い日で帰りの送迎前であった。地震のときには利用者とともにまずは近くの公園に逃げたが、寒かったため、一般市民と一緒に魚菜市場に移動したが、利用者がパニックになり走り回ったり、鷺田さん自身も噛みつかれたりした。振興局の方が個室を用意してくれて、そこで 2 日間ほど過ごした。支援者自身も自宅や家族がどうなっているかわかっていない状況で辛い状況であった。



○宮古市企画課 田老総合事務所 所長 齊藤清志さん

宮古市田老総合事務所は令和 2 年度に移転した。旧事務所は震災当時、津波の被害からも免れ、自家発電があったため、震災後の暗闇の中、唯一の明かりであった。

田老地区の人口減少に歯止めがかからない。平成 23 年度 3 月は 4,434 人だったのが、令和 2 年 3 月で 2,855 人。1,579 人の減少だ。震災 4、5 年後には他市へ 3 世帯同時の転出が増えている。高齢化率は 43%（宮古市 38%）、川井地区では高齢化率 57% だそう。小学校の生徒は 100 人程度、3 年生は 9 人のみ、婚姻数も減少している。

田老の防潮堤は津波が町に入るのを遮るものではなく、津波が来た時に逃げるための時間を確保するためのものである。震災後に建設された防潮堤は 100 年に 1 回の津波に耐えられるようなものを考えて作られている。新しく作られた防潮堤は従来の地面からの直立型ではなく、山のような形状で作られている。直立型では津波が流れ込んだときに防潮堤の周辺で滞留が起こり、防潮堤を破壊してしまったためである。

震災の時には 3m の津波が到達すると予想され、報道された。田老では「地震が起こったら、高いところに逃げろ」が身につけているが、報道からの情報と過去の津波の経験から作られた防潮堤の存在により、逃げるのが遅れ、津波の犠牲者が増えたのではないかと考えられている。

震災後の地区の住民間には見えない壁がある。津波の被害にあった人達は何とかなして津

波の経験を語り継いでいきたいが、高台に住み津波による被害を受けなかった人たちは震災についてはあまり語らない。震災時、津波の被害を受けなかった人達は停電やライフラインの断絶があり、震災の被害にはあっているが、震災当時、避難所に入っていないことにより排除され、救援物資などが手元に届かない状況があった。避難所にいるかどうかで支援の量や質が異なる状況が生まれ、現在も地区の住民の間に溝ができています。

田老にある「山王岩」は太郎の人にとっては大切な場所であり、津波が来ても変わらず残っている。自然の力強さと人工物のはかなさが対比しているようだった。



【3日目】道の駅たらう→「学ぶ防災」→遠野→帰路につく

道の駅たらうに集合し、「学ぶ防災」に参加した。たらうにある防潮堤の見学と説明を聞いた。従来あった防潮堤に加えて、新たな防潮堤が県の計画で建設されている。防潮堤により田老地区からは海面が見えず、説明をしていただいた佐々木さんは、海面が見えないことにより津波がせまっていることを感じる機会を損ねていると話されていた。後でみる、たらうを襲った津波の映像でそれを実感することになる。

また田老地区は高台に逃げるための避難道が町全体に作られており、どこからでも高台に逃げることができるようになっていないこと、また急いで逃げるときにぶつからないように道路の交差点は角がないように作られていること（隅切り）に正直驚いた。「津波がきたら高いところに逃げる」ということは東日本大震災以前から歴史上で幾度となく津波を経験してきた場所ならではの伝承である。

震災遺構である「たらう観光ホテル」はエレベーター設備が整っていた。建物の2階まで津波が押し寄せたが、建物が柔らかい素材でできていたため、津波で壁などは流され枠組みだけが残されたとのこと。それでも鉄骨で作られた階段はひしゃげ、エレベーターは形状を残さず、かろうじてその存在がわかる程度であった。ホテルの最上階に上がり、田老の海が見える部屋で津波が町を飲み込むときの映像を見た。今まで報道等で見た映像では見たことがないので、津波というよりは、海面全体が持ち上がり、盛り上がった海水の塊が町を飲み込んでいく様子だった。今の穏やかな田老の海を後ろに見て対比しながら、本当に息を

のむ、言葉を失う映像であった。田老の漁港に入ってくる入江は、間口が狭く、津波が盛り上がりやすい地形になっているとのことであった。田老だけでなく、三陸に住む人々はこの津波とともに生きている。東日本大震災だけに始まったことではないことを実感した。そして、田老の人々が津波の体験を語り継ぐことはただ起こったことを知ってもらうことではなく、津波の歴史を後世に「伝承」という形で「つないでいく」ことだと感じた。



○遠野

沿岸部の町と風景が異なり、紅葉の季節でもあったため、町全体が紅葉色に染まっている印象であった。津波や震災の軌跡を追ってきたところから少し離れて、張り詰めていた気持ちがとても穏やかになった。遠野は震災後、沿岸部の後方支援を行なってきたとのことだった。この穏やかで文化に富んだ町も震災後は救援体制のベースキャンプとなり、復興の一役を担っていたと聞き、沿岸部からの道中、沿岸部支援の利便性を実感した。想像がつかないが、後方支援も壮絶だったのではないだろうか。博物館で遠野の歴史や文化、遠野物語について学んだ後、遠野物語の語り部、大平さん宅に伺った。囲炉裏を囲んで、遠野物語を4話ほど聞き、そのなんとも不思議な物語に引き込まれていった。東北の言葉はもっとわかりにくいものかと思っていたが、角がなく、じんわりと柔らかく、とても心地よく耳に入ってきた。



○フィールドワークからの学び

今回の宮古のフィールドワークで学んだことは、現地に足を運び、見ること、聞くこと、感じることの大切さである。事前課題では、本やインターネットなどで調べたが、本当に実感が湧かなかった。現地に行くことで、TVなどで間接的に知っていることがいかにあいまいで、本当の事実にはたどり着いていないことだと感じた。「証人」になることの重要性を実感した。また、今回、宮古では漫画トークや交流会がオンラインでの実施となったが、観光のつもりで出向いた先で多くの人と触れ合い、震災当時の話を熱心に話してくれる人々に出会った。自然に起こった「人との出会い」が今回の目的の一つである震災の「証人」になることにつながり、そして現地に行って学んだことを私たちは「伝承」していく役目を持ったと感じた。今後、どのようにつながっていけるのか、考えていきたい。

先生方は10年間、このプロジェクトを通じて被災地の変遷を見てこられた。私は今回初めて震災後の東北の地に足を運んだが、先生方が現地の方とお話するのを聞いていて、継続して通い続けることの大切さを実感した。1年1年、被災地は変化し、住む人の生活や住む人の気持ちや考えが変化していく。被災地に継続して入ることは、その変化を体感し、現地の人のその時の言葉を聞き、受け止めることにより、復興に向けて日々前に進む被災地がふと立ち止まり、少し今までを振り返り、そして改めて、前に進むことができるように後押ししているのではないだろうかと感じた。